

「吉野川で遊ぶ」 第4回 吉野川河口干潟

なかじま
中嶋

まこと
信

てらしまよしやす

寺嶋吉保

：総合科学部，医学部

吉野川の河口は美しく、楽しい。200kmの大河の河口幅は1.3km。大きな町に隣接しているのにゆったりした空間が残されているのは不思議だ。南側の岸には広い干潟や葦原、さらに中洲干潟がある。この干潟は1996年に「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類渡来ネットワーク」に登録され、環境庁も重要な湿地と認定している。栄養豊富な河床はゴカイやカニ、貝類の生息地だ。それをねらって飛来する鳥類は年間で150種類にもおよぶ。この豊饒な空間は、探鳥などの自然観察のとおきのポイント。季節ごとに入れ替わる渡り鳥を追うのも楽しいが、暖かくなってからのお勧めはカニ類の観察。絶滅危惧種のシオマネキはいとも簡単に見つかる。小さなチゴガニがそろってハサミを振り上げる姿は、いとおいしい。カニと戯れながら、地球上の生物の来し方・行く末を考えて見てはどうか。また、この干潟に影響必至な橋を架ける計画が2件進行中だ。その妥当性を検証するという社会派の迫り方もある。

写真は南岸の金沢樋門付近から上流側を見たところ。アオノリを養殖するノリヒビが立ち並ぶのは冬の風物詩。二昔前はハマグリやアサリが大量にとれたそうだが、今も大切な生産の場だ。ここは常三島キャンパスから徒歩で15分の至近距離だ。車なら、吉野川大橋南詰めから河川敷に下りてグラウンドの東端まで進めばよい。すぐ前から干潟がおおらかに広がる。



南岸堤防上から上流側の吉野川大橋を眺める
輝く水面と広い空。散策する人はゆるやかに流れる時を楽しむ。



シオマネキの雄
雌を誘うために大きな片手を振りかざす。それが潮を招くように見える。井口利枝子が写す。